枝打ち 樹の上の仕事

名人　山本　晃治（47）　岐阜県不破郡関ヶ原町
聞き手　久古　和貴　岐阜県立郡上高等学校3年

平成19年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、38名の「森の名手・名人」がいます。
この「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

1. 今須林業の人工林

今須の場合は、山林面積がだいたい2200haで、半分の1100haが複層林になっている。もっと複層林が多くてもいいと思うけど、やっぱり山に携わる人間の数と、面積とのバランスがちょうどそんでよかったんじゃないかなって思う。本当に、植林して20年足らずの山もあれば、200年スギの立ってる山もあるし。

今須にはクマタカがいますけど、木の枝が打ってあるから林内を飛べるよね。その林内を飛ぶ空間が無いと、山があってもだめなんやね。クマタカんなると大きいもんで、かなり大きなスギの木なんかに巣を掛ける。大径木としては何本も残してるから、巣も掛けやすいと思うし。今そういう大型の猛禽類が一番、住みかがないといなくなっちゃいますよね。

今須の平均の所有面積が大体5ha。家にあるのは8haぐらいじゃないですかね。多くもないけど、1本ずつ、ほんとに見て、この木には今どういうことをしたらいいのかっていうのは全部、たいがい見ればわかるし。

2. 枝打ちはナタ

枝打ちはナタですね。この今須林業の枝の打ち方っていうのは、昔からずっとやられてきたから伝統みたいな感じで。全部両刃、二枚貝を閉じたような刃先で、先に「ちぼ」っていうのがついてるけど、これは、スギの枝を取った後でも、新芽が伸びてくるもんで、新芽をたたいてつぶせるように。

ナタの重さでは、たいがいみんな使ってるのは700gから750gなんやね。僕が使ってるのは、850gから1kgの間。小さいナタだと普通に枝打ちはできるけど、堅い枝なんると手に衝撃が来るんで、重いのを使ってるけど。今使ってるナタは四国の会社で作ってもらってる。父の代のときに、こちらのナタの原型を向こうへ送って、こういうのを作ってくれって頼んだみたい。僕も最初のころ家に置いてあったいろんなナタを使ったけど、焼きが強すぎると堅い枝なんかたたくと刃が欠けるし、焼きが甘いとやわらかいって言うか刃先が微妙に寝るし。それが、今のナタを使ってると、ほとんどない。よく切れるし、いいナタだとは思っている。

ナタは、作業する日は朝いちと10時と昼と3時に、4回研ぎます。ちょうとでも雨が降るとその湿気でね、ワーとサビが浮いてくるもんで研いで置いとくことはしない。木のヤニとかアクがいっぱいナタについて、そんまんまにしておくとサビない。

▼山本晃治さん

3. うちのぶり縄

普通に枝打ちで、そんな太くない木で登るんだったら、ぶり縄のロープの長さが15mで十分なんだけど、僕の場合は胸高直径1mとか、下手すると超えてくるやつに登るもんで、短いと届かないのね。直径1mだと周囲が3m以上あって、足場の結わえるところを足して次のやつをまわそうと思うとかなりの長さになるでしょ。だから、僕のやつは2本とも20m近い。

ぶり縄のいいところは、木に傷をつけないこと、結構、身軽に林内が移動できて、ある程度短時間で登って降りてこれるっていうことですかね。ハシゴだと高さが知れてるでしょ。僕らはもっと上のほうへ上がるもんで。鳥の巣の調査は40mぐらいやね。普通のスギ・ヒノキの枝打ちやったら、25m前後やないかな。怖いとか、べつに思ってない。落ちるってのはもう、単純なミスで落ちると思うもんで、それだけはないように心がけているけど。

ぶり縄は2セットあって、作る時期を順番にずらしてる。ぶり縄の棒はリョウブの木を使ってる。軽くて、しなりとかなんか丈夫いもんで。冬場になるべく根元のほうを切って、乾燥させると皮が密着してて、そんなにはげないから、そういうのを使ってますね。

同じような太さでも、今須みたいに何にも枯れ枝とか出てない木だと、ぶり縄を回しても引っかからないから、カーッとほどいて登ってくのが速いんですけど、よそ行って登ると、角みたいに枯れ枝が出てるので、ぶり縄を掛けて登って次行って、次下ほどくでしょ、そのときに引っかかるんやね。そうすると引っ張ろうが何しようが外れないでしょ、それが嫌で。

▲ブリ縄による木登り

スギやヒノキって、天気のいいときは苔があってもザラザラしてるけど、雨がいったん降ると川の中のヌルヌルの石と一緒でしょ、表面が。あれは危ないから、ぶり縄で木に登るっていうと、やっぱり、雨っていうのはなかなか、やれないですね。

降りてくるのは、ぶり縄を使って右手左手でぐっと締めて、足で木をある程度はさみながら、滑って降りてくる。鳥の調査のときは、枝が引っかかったりするもんで、クライミング用のザイルを使って、上の枝に引っ掛けてスーッと降りてきますけど。

4. 樹木の採穂

日本でも絶滅するといわれている樹木が何種類かあって、今年やったのは、中央長野県の方にあるヒメバラモミ。普通のモミではないですけど、そのモミの穂を採ったりする仕事をしたね。新しい芽をある程度の長さ摘む、それが採穂やね。これもぶり縄で登ったけど、高さ50mあるんですよ。その前にやったのは、岐阜県の東濃ヒノキ。東濃地方のすべての山を回って、一番いい木を選んで、いい木ばかりの穂を集めて、試験場で交配させて、精鋭樹の種をとる。

▲山本さんの作業着姿

5. 鳥の巣の調査

年間150日までぐらいが鳥の関係の仕事やね。最初の頃やってたのは、鳥がもういないときに巣に登って、直径とか、いろんな計測をするんやね。あと巣の中にあるごみを回収したり、木の上に記録用のカメラをつける仕事。クマタカなんかは営巣中に巣に近づくと、子どもがいてもほかっといてよそへ行っちゃう。イヌワシも下手すると、いなくなる。オオタカはいなくなるってことはしないもんで、営巣して卵を産んだらいっぺん上がって、卵の大きさや重さも測って、ヒナがかえるとヒナのくちばしとか羽根の長さとかを全部測るわけです。毎年だいたい10巣以上。それを何年も、続けてる。

もうひとつ違う仕事っていうのは、代替巣、人工で僕が掛けた巣ね。これはオオタカ。工事現場とかの何百m以内のどっかに林があればそっちに、人工の巣の台を上げて、鳥の巣に近いような状態のを作って上へ乗せて置くんやね。そうすると親鳥が来てそこを自分の巣として使う。もう何箇所か成功して使っとるんやわね。

6. そま師・そら師の仕事

そま師っていうのはきこりさんのこと、そら師っていうのは、上で枝を切ったりとか、クレーンでつったりとかする人のこと。親がやってたもんで、僕もそれを見て覚えて、こんな大径木でも切り倒すんですけど。ケヤキとか上に登ってって枝切るのもあるし、根元から起こして倒してってすることも全部。でも、自分の身近にそういう人がいて、毎日仕事しないと、覚えられないですよね。今自分がやってられるのは、親を見てたから。逆に周りに親と同じようにまでいくかっていう期待を持たれると、それが僕にとってはかなりのプレッシャーになるわけね。

▲枝打ちの実演の様子

枝切って落とすときは危ないね。やっぱ、何べんかやらんと、怖さが分からんやろうね。山では、人が下敷きにならないかっていうのを気にして、お寺とか神社で伐るときは、失敗すると神殿とか壊れるもんで、かなり緊張してやってるけど。JRの時なんかは、何にも機械も入らんトンネルの横で、夜、電車が通る間をぬっては、切るんやわね。線路の脇に、電気が流れとるから、感電が心配やね。枝が触ると木の上におる自分ももちろんやけど、ワイヤーで吊るもんで、下でワイヤー触ってる人も流れるでしょ。

7. 今の仕事について思うこと

やりがいっていうかね、えらい仕事なんだけど、もうやるのが嫌だとか、そういうことは思わないね。やってて、ああ僕の仕事なんだなっていう。ほかの仕事ってそう何にも考えられないし、考えないってことは自分に合ってるのかなって思ってるけど。ま、育林の方が専門だから川上に住んでるものがいい木を育てて、木が水を蓄えて流して川になるって言えば、川下のほうにもいいんじゃないかなってね。やっぱり、世話をして、いい木になれば、山全体もいい山になると思うんでね。

伐り出すときはやっぱりね。ちょっと、もったいないかなっていう時もあるし、80年とか100年とか超えてくると、先祖が、ずっと手をかけてきた木じゃないすか。で先祖に対しては、ありがとうと思いながら、今切らしてもらうのはちょっと申しわけないけどっていう感じがありますかね。逆に、枝打ちで、若い木を打つときは、今この木の枝を打って、将来、誰が伐るのか、何代後になるのかってのは、ぼんやり考えたりするときありますけど。

名人　山本晃治（やまもとこうじ）さんのプロフィール

- ●生年月日：昭和35年1月23日生まれ
- ●出身地：岐阜県不破郡関ケ原町
- ●職　業：そら師

岐阜農林高等学校出身。枝打ち名人父の跡を継ぎ、林業・技術指導に従事する。県内外でも、ぶり縄の技術を活かし、40mを超える高木に登り貴重樹木の種子・若芽の採取や、猛禽類の営巣内調査なども行っている。ボランティアで小中学生のための林業教室の講師を務める事もある。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
(社)岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】